

翔友会便り

— 忘れ得ぬあのシーン、あの言葉 —

1. 僅かに、確かに、微妙に操作

昭和19年卒 牧野 鐵 五 郎

今、此処にポケットサイズの小びた手帳がある。開けてみると、私が昭和15年9月1日(1940年)に初めて伊丹飛行場で95式3型練習機の操縦訓練をはじめたときに書き始めた操縦手帳である。今ならモットスマートな手帳があるだろうが、当時のことだから、極く普通のありふれた手帳であるが、この日の飛行から何十年経過した現在でもこの日に感じた私の記録は、今読み返してみてもいかに新鮮であり、長い飛行生活のどの場面に当てはめても基本中の基本であると感じている。

その言葉が「**僅かに、確かに、微妙に操作**」である。今当時のことを思い出しながら、そのときの記録を改めて見ることにした。

昭和15年9月5日 曇り

愈々本日より夏期特別訓練に入る。第3班に編入。助教さんは同志社の須川さん。

午後初めて飛行機に乗る。過去何年か住み慣れた地球を数百米離れるというにはあまりにもあつ気ない離陸であった。ホンの少し前に霧が峰でグライダーの訓練を受けてきたが、一寸そのときの離陸にも似た感じの飛行機の離陸であった。

プロペラーの後流の関係か、離陸の時には相当右足を踏まなければならないようで、左旋回の時の操縦桿は「当て舵」が思ったより大きくてまるで右旋回のために操縦桿を右に倒しているように思えた。

下をみると、丁度実り始めた田んぼの稲がまるで絨毯のように見える。気流が良いためか飛行機は本当にスムーズに飛び続けている。

操縦席の計器盤のガラスには、嬉しくてたまらないニコニコ顔の私が写っている。

と突然！身体が大きな力で機体の底に押し付け

られる！身体全体が抑えて手も足も自由に上がらない。

「アアこれが話に聞いていた急旋回か！」
そう思ったとき前席の須川さんがニヤリと笑いながら後ろを振りかえった。

エンジンの音が急に静かになる。まだ飛行場があんなに遠いのに、もう着陸体勢に入ったんだナ～と思う。

13分の第一回の飛行は長いようで、短い初飛行であったがその感想は

「愉快！」
の一言であった。

ピストで初飛行の報告を終わり、落ち着いて考えてみると、自分でもあんなに上手く操縦が出来るんだろかという心配が浮かんでくる。旋回一つを取ってみても、あんなに細かい操作が果して出来るだろうか。

今日の総括は

「**僅かに、確かに、微妙に操作**」
に尽きる思いがする。

あれから何十年、私の操縦人生の端々に第一日目の熱い思いが引き継がれたことに私は感謝したい。

2. 忘れ得ぬ言葉、あの日あの時

昭和44年卒 小野田教弘

「誰に乗せてもらったの？」

昭和40年(1965年)5月のある日、四国高松空港での同志社単独合宿にて。

体験慣熟初飛行の後に周りから聞かれて。

答えられなかった！後から先輩から言われた。

全国大会2位の山田先輩だったと。

「お前！何してんや！キंकも知らんのけ！」

昭和40年(1965年)5月のある日、四国高松空港にて。桐山先輩から。

「次！小野田行け！」

昭和41年(1966年)6月のある日、四国高松空港の中免強化合宿にて。

故北尾教官から。初めてのソロフライトに。

足元からちらっと見えた離陸滑走中の滑走路のコンクリートが忘れられない。H-22Bは、ほんとうにぼろかった！

「それなりにな！」

昭和41年(1966年)9月のある日、故北尾教官から。

同僚から「小野田は中免取れたし…もういいんですか？」と聞かれて困った顔をして。それ程に私は技量が下手でした。

「言い訳すな！」

昭和41年(1966年)10月のある日、窪田教官から、富山空港にて。

着陸操作に大きくヘマをして苦しい言い訳をしたとき。

激高した青年窪田教官でした。

「貨物船に乗ってまでも行きたい！」

「どんどん資料を送るからな！」

昭和42年(1967年)富山合宿の夕食後の雑談中の窪田先輩の言葉。

アメリカにあこがれて、絶対にアメリカに行きたいんだと…。

「いいか！有る物は絶対に有るんやからな」

昭和41年(1966年)真冬の鷲野空港合宿所にて、竹鼻先輩から。

宿舎の鍵を失くしたみすゞ嬢が泣きながら謝って。一生懸命探した結果鍵が出てきた後の竹鼻先輩の論ず厳しくもやさしい心に残る言葉…。

「グライダーなんてちょろいもんじゃないけど」

昭和42年暮れの追い出しコンパの阿部先輩の言葉。

ジェットパイロットの夢潰えて航空部に入部。

メンターの飛行経験からすればグライダーなんておもちゃみたいに考えていたとか。でも3次元の世界は難しいと…。しみじみと…。

「小野田クンってほんま真面目なんやね～」

昭和42年(1967年)少し女っぽくなった先輩T嬢を褒めちぎったら何故かこんな反応が。

3. SOUL MATES

昭和49年卒 速見直喜

「あんたのこといつも見ていた」。航空部50周年記念式典の翌朝、佐々木先輩よりお電話を頂き、記念事業委員を務めたことへの労いの言葉の後に、このお言葉を聞かして頂いた。

佐々木先輩は亡くなられて、今はこの世にはおられません。しかし、この言葉は今もお胸の中で、佐々木先輩との思い出と共に生き続けております。

「翔友XX」編集後記、編集長の同志社航空部に対する別れの歌のように聞こえてきた。

「いったいお前は何をしてきたのだ」と、もう一人の私が、わたしを見詰め、自問する。

まず、自分のことを知ってもらうこと、そして現役部員一人一人の顔と名前とを覚えること、それから始めようと思い合宿に足を運んだ。

お互いの気心が分かってきたところで今度は、「航空部人生」何時も編集長を見て体感し、そして体得してきた同志社航空部への思いを、きっと必ず編集長が読んでいて下さると信じて、部のホームページに書き込んでゆきました。

森川監督、玉井コーチ、三田村教官、そして学連の田口教官、宮地教官の指導の下、現役部員の皆さんはとても頑張ってくれました。

平成18年11月14日、夜遅く、ホームページ、ブログのコメントを開いたところ、画面から“健闘を賛える。窪田昌三”その言葉と、その名前が目飛び込んできた。泣けてきました。

平成19年2月25日、全国大会を目前にした木曾川合宿、一日の練習を終え宿舎の教官室でくつろいでいると、一回生の女子部員がやって来て、「お疲れのところ申し訳ありませんが、この紙に

全国大会に出場する中村さんと前田さんへの応援のお言葉をお願いします。部員全員の言葉と一緒に、この色紙に貼って二人に渡したいのです。二人には内緒にしておりますので宜しくお願い致します」。と言って、積雲の形に切り抜いた小さなメッセージカードを残して部屋を出て行きました。全国大会に駒を進めてくれたことは、とても嬉しいことです。しかし、こうして仲間のことを思う言葉や気持ちは、さらにさらに嬉しいことです。

大切な事は仲間の身になること、仲間の人生を生きることだと思います。

見詰めていてくださる魂がある。

仰ぎ見ることの出来る魂がある。

それらの魂を受け継ぐ者たちがいる。

青春の日々を生かしてくれた同志社航空部。

うまく言葉には出来ないけれど、その「魂」をこれからも生きてゆきたい。

4. 「壊したのは、機体だけやないぞ！」 昭和39年卒 齊藤良和

私が航空部に入部したのは入学同時の昭和35年4月でした。小野哲部長、牧野鐵五郎監督兼教官はじめ多くの指導者のもとに、同期12名と一緒にしました。それ以来4年間の私の部活動といえば、初級滑空士資格取得がやっとの、部員としては劣等生でした。それでも学部卒業まで続けられたのは、持ち前の鈍感さと、部長、監督、教官、先輩そして同期部員各位の寛大さの御陰に他なりません。

このような私でしたから、失敗談には事欠きませんが、これらの中で今だに私にとって心残り、学部は卒業したものの、航空部を卒業出来ないほどの事件がありました。

昭和38年、八尾飛行場における同志社大学の単独合宿で、朝の出庫時に私の不注意で、あろうことか曳航車を、グライダーにぶつける事故を起こしてしまったのです。

このグライダーというのが、前年37年11月に命名式を終えたばかりの虎の子、H-23C、“AEO-LUS”だったのです。

この時に牧野教官から、厳しい叱責を受けたのはもちろんですが、教官の“お前が壊したのは機体だけやないぞ！この機体を手に入れるために苦労した者たちの気持ちも傷付けたのと同じや”この一言は、後々まで私の心に残ることとなりました。

この一件は、私が生来軽率で、物事の判断に深慮を欠く性格であることを心深く認識させることになりました。

工学部を卒業して、ある化学工業原料と製品を作るメーカーに就職したのですが、このとき認識した私の欠点を意識して対処した大きな事件が、私の40年近いサラリーマン人生において二件ありました。

一件は責任者として赴任していた工場で起きた、委託業者の感電死亡事故です。これは委託業者の過失が原因であることが証明されましたが、私は識者の助言を受けながら、労働基準監督署、役所そしてマスコミなどに熟慮のうえ誠意をもって対処し、会社に与える悪影響を最小限に止めることが出来ました。もう一件は同じ工場で起きた重油を工場外に流失させた、公害事故です。このときは週末金曜日の終業時に従業員がバルブを閉め忘れたため、翌週月曜日の早朝に側溝に浮かんでいる油膜に私が気付くまで、重油が流失し続けていたのです。気付くまでに時間が掛かったため、重油は近くの川を経て、海に流出直前までの多量になっていました。

このときも手早く重油のディーラーにタンクローリーを河口に出動させて、流出した油の回収を手配したり、工場従業員で出動できる者を集め、河口から上流に向かって油の回収に当たらせました。事後は役所の公害課や地元の有力者に誠意をもって対処し、多額の漁業補償をとまなう公害になることだけは免れることが出来ました。

これらの事件の対処には、航空部で得た“お前は生来軽率だぞ！誰かに相談したか！充分熟慮したか！もっとやることはないか！”の教訓を生かしました。

事の重大さに比して私としては冷静に対処できたのは、まさに航空部におけるこの貴重な経験の御陰です。

ささやかで貴重な経験をご披露した今、航空部の卒業資格を得たような気がしてきました。この機会に同志社大学航空部を卒業させていただきませう。皆様、本当にありがとうございました。